

虎とインフルエンザ

山梨県 富士ニコニコクリニック 渡邊 善一郎

今年の干支は寅ですが、白虎は西の守り神獣です。古代の人々は天変地異や病気の流行は悪霊・怨霊が侵入することで起こると信じていたため、支配者は国を治めるのに盛大なお払いをして悪霊・怨霊からの災害を防いでいました。

なかでも陰陽師は、中国から輸入された陰陽五行説に則り悪霊・怨霊を治めていました。都市を建築する際にも都を中心に東西南北に守り神(四神)を配置し、外から来る邪気(悪霊・怨霊)の侵入を防御していました。ちなみに奈良飛鳥のキトラ古墳の壁画にも、守護神として東の青竜・西の白虎・南の朱雀・北の玄武そして中央の石棺にはピールのラベルにもある麒麟が描かれています。

病人に対して神道では死霊や疫病神だとし、仏教では疫鬼、魍魎魍魎の仕業だとしました。つまり「たたり」である悪霊・怨霊が身体に取り憑くことで病気になると信じられていたので、古代日本では神主・巫女・陰陽師・山伏・僧侶などによって中国から伝えられた呪術(お払い・お祈り・まじない)が行われました。しかし室町時代になると、後世方派の始祖である曲直瀬道三により医学と仏教が分離され、中国では張仲景(後漢150年頃の人)が著した「傷寒論」の中で、疫病の原因は傷寒中風、風寒暑濕燥火として治療を行い、「医」を「巫」から切り離しています。その傷寒論にも四神獣にちなんだ処方があります。

地図上では中国の都を中心に、東方には海、西方には砂漠、北方には寒冷地帯、南方には熱帯地域があります。東方地域では湿気が多く、喘息・リウマチなどの病気が多発します。これらの病は湿によって起きると考え、身体を温め湿を除く生薬の麻黄(青=緑色)を主薬とした青竜湯を用います。エキス剤では小青竜湯です。西方地域は乾燥しており、アトピー性皮膚炎・糖尿病が多発します。乾燥によって病が起きると考え、身体を冷やして潤す生薬の石膏(白)を主薬とした白虎湯を用います。エキス剤では白虎加人参湯です。北方地域では下痢・胃腸障害・腰痛・頻尿が多く見られます。寒冷によって

病が起きると考え、身体を強く温める熱薬である附子(黒)を主薬とした玄武湯を用います。エキス剤では真武湯です。玄武皇帝が即位してから、皇帝と同名は使用できないため真武湯に改名されました。残る南方地域を守る朱雀湯には現在まで諸説があります。南方は亜熱帯地位であるため熱湿が強く、マラリア・赤痢などの風土病が多発したと推測します。私は、この朱雀湯は熱邪を下痢させて排除する十棗湯だと考えています。十棗湯に配合されている大棗(ナツメ)は赤色です。この十棗湯は強い瀉下剤であり、エキス剤では三黄瀉心湯で代用します。

2009年は新型インフルエンザ(A/H1N1)が大流行しました。感染力は強いですが、幸いにも死亡まで至る重症例は少なく、抗ウイルス薬も有効です。私も救急外来勤務日に流行の大波に遭遇しました。今までの外来ではインフルエンザA型陽性は数名でしたが、この日は50数名診察者中に発熱者は32名で、その中の23名(71.9%)にA型陽性が認められました。多くは10歳代の高・中学生の若者でした。診察では発熱一、二日目の受診で、寒気は強いのですが、鬱熱状態の顔赤や目赤も強く認め、腹診では半数の者に胸脇苦満を認めました。つまり、発病早期でも急速に表(鼻咽)から裏(胸中の気管肺)に進展することが推測されました。季節型インフルエンザでは鼻咽頭でのウイルスが増殖し、新型インフルエンザは気管肺でも増殖する報告と一致すると考えています。

今回の新型H1N1インフルエンザは温熱病もしくは傷寒病でも化熱が強い病態なので、裏熱を清熱する処方が有効であり、その処方には今年の干支でもある寅、すなわち白虎加人参湯が含まれます。

インフルエンザ感染症には漢方薬は有効であり、発病初期の検査陰性時期にも扶正祛邪のために積極的に漢方薬を処方し、翌日の陽性確定時より増殖を抑える抗ウイルス剤を併用する東西双補の治療が最も効果的実践的であるとと考えています。